蓮如

―われ深き淵より―

五木寛之

中央公論社

蓮如（れんにょ）
——われ深き淵より——

一九九五年　四　月二五日　初版発行
一九九五年　六　月一〇日　四版発行

著　者　五木寛之

発行者　嶋中行雄

発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二—八—七
振替　〇〇一二〇—四—三四

印刷所　大日本印刷
製本所　大日本印刷

©Hiroyuki Itsuki 1995, Printed in Japan
ISBN4-12-002435-0

蓮如（れんにょ）

——われ深き淵より——

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

第一幕（二場） 5
第二幕（二場） 77
第三幕（三場） 121
第四幕（五場） 177

第一幕

存如　蓮如の父。本願寺第七代留守職
（法主）
如円　存如の妻。蓮如には義母に当る
蓮如　存如の庶子。三十九歳
如了　蓮如の妻
祐子　蓮如の妻如了の妹。のちの蓮祐
応玄　本願寺嫡男。如円の実子
堅田の法住　堅田門徒の頭で紺屋の元締
鳥辺の座頭　仏説琵琶の名手
辻の女　立君と呼ばれる辻の遊女
大男（五郎）　公家の下人
小柄な男（太郎）　公家の下人
塩売りの加助　能登から逃散してきたもと塩焼き

下間玄英　本願寺執事
トキ　如円の召使い。下間家の養女
備後法師　清水坂者の頭。祇園社神人
坂者A（辰）
坂者B（尉）
坂者C（定）
餅売り女（おふく）
魚売り婆（つね）

他に、法住の輩下の研屋の権八、麹屋の庄助、瀕死の老女、大原女、念仏踊りの男女、など

第一場

開幕前

どこからともなく法螺貝の音。それに呼応するように、どっと群衆の喚声がおこる。駆け抜ける足音。遠くで早鐘が鳴り、迎え撃つ手勢の鬨の声と、乱闘の響き。それと混って天台声明を稽古する声。念仏踊りのにぎやかな鉦、鼓のさざめきもかすかに流れてくる。不意に長く尾をひいて鋭い女の叫び声。ふたたび遠く群衆の喚声。それがきこえなくなると秋の虫の音と重なって、沈んだ朗読の声がとぎれとぎれに流れてくる。『教行信

証』の一節である。その間に何度か赤子の泣く声と、それをあやす男の声。

開幕

一四五三年（享徳二年）晩秋の夜。

月が雲間に隠れて、あたりは暗い。京、東山大谷の本願寺。正面やや右手に小さな二つの堂宇と、それに続く粗末な庫裡（くり）の一部がぼんやりと見える。その窓の点滅する明かりに、読書している男の影がうつっている。すぐ背後には山襞（ひだ）と有力寺院の巨大な屋根が黒々とそびえ立ち、わびしい本願寺をいっそう貧弱に見せている。庭先に井戸。舞台前縁が道になっていて、左手へ続く。左端に大銀杏（いちょう）の樹。その根元にうずくまるボロ布のような黒い影。鋭い女の悲鳴と足音。

やがて白い布をかぶった女が小走りに出てきて、背後をうかがう。立君（たちぎみ）と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

呼ばれる辻の遊女である。

辻の女　やれ、やれ。あぶないところだった。ただで体をもてあそばれたとて、べつに減るもんじゃあないけど、命までとられちまったら一巻の終りだもの。それにしても、ひどい世の中だねえ。しがないあたしたちの懐まで狙うやつらがいるんだから。ちかごろ京に流行るもの、辻斬り火付けに打ちこわし、おまけに今夜は馬借の一揆。あーあ、これじゃ稼ぎにもなりゃしないよ。

おや？　あの人影は――なあんだ、坊さんか。坊主じゃしょうがない。渋谷の仏光寺みたいに繁昌してる寺の坊さんならいい鴨だろうが、この貧乏寺じゃねえ。町の噂じゃ、仏さまにおそなえする御仏飯まで粥にうすめて、皆ですすっていなさるそうな。わびしい話さねえ。さ、早く帰ろう。こんなところでぐずぐずしてたら、逆にお布施をせびられちまいそうだ。（犬の遠ぼえが長く尾をひいて消えると、急に風が吹いてきて、銀杏の落葉が地を走る。女、身ぶるいして）

なにやら今夜は気味が悪い。妙な事でもおこりそうな――。おお、寒む。（行きか

けて、あたりをうかがいながら）あ、だれかくる。またさっきの奴らが執念ぶかく追いかけてきたのかしら。（いそいで銀杏の大木の背後に身をかくす）

虫の声と朗読の声がふたたびきこえだすと、闇の中から二人の男があらわれる。一人は風呂敷包みをさげた大男。もう一人の小柄な男は背中に老女をせおって、よろめきながら後につづく。

小柄な男　お頭（かしら）、ちょっと待ってくださいよ。この婆さん、くたばりかけてるっていうのに、なんでこんなに重いんだろう。おい、婆さん、まだ生きてるんか。どうなんだい。え？　なんだって？　きこえないよ。念仏でもとなえているのかな。

大男　ん？　どれ、どれ。（老女の顔に耳をよせて）

なるほど、そうか。（低音のゆっくりした喋りかた）

小柄な男　なんですって？

大男　うむ。オ・シ・ッ・コ、だと。

小柄な男　え？（天をあおいで）あ――、濡れてきた。あったかいなあ。風呂にはいってるような、いーい気持ちだぁ。（やさしくさとすように）婆さんよう、なんで死ぬ前にしょんべんなんかもらすんだ。もうしばらく我慢すれば鳥辺山じゃないか。まわりじゅう死人のお仲間がごーろごろ。あそこへいけばシャレコウベにまたがって、誰に遠慮もなしによう、しょんべんでもなんでも思うぞんぶんできるんだぜ。それを、こんなところで――くそ！（突然、両手を離してドスンと老女を地面に落とす）

大男　おい、おい。年寄りにはやさしくするものだ。気の毒にのう。（老女の片脚をつかんで無造作に引きずり、銀杏の根元に荒っぽくもたせかける。風呂敷から握り飯と瓜を出し、皿にのせてその前におく）本当はな、お前さまを鳥辺山まで運んで、西の空のおがめる具合いのよい場所に置いてくるようにと、ご主人様に命じられてやってきたんじゃが、ここから先は大そう急な坂の道、あの小男も疲れはてて癇癪をおこしておる。それで、ものは相談だが、婆さま、ここでひとつ、往生してはくれまいか。どうだ、見たところ吹けば飛

ぶような寺だが、ほれ、ちゃーんと阿弥陀堂もある、なにやら坊主のとなえる声もきこえる。ありがたいことだ。わしらは疲れておるでの、これで帰らせてもらおう。よいな？　うむ、わかってもらえたか。（勝手に合点して）礼はいらんぞ。おや、もう息がない――。（老女の体がぐらりと傾き、樹の根元に倒れる）

小柄な男　（突っ立って腕組みしたままそれを見おろし）ばあさん。あんたにゃ大そう世話になったが、これも奉公人の宿命（さだめ）というもんだ。聞けば十三、四の小娘のころから今のご主人様に五十年もつかえたそうだが、身分の高いお屋敷では家から死人をださないのがしきたりだから、しかたがないよなあ。加茂の河原に捨て置かれて、生きながら犬に食われる情けない奴らもいるんだ。それにくらべりゃ、寺のまん前とは豪気じゃないか。じゃあ、な。これでおさらばするぜ。

大男　われらを怨むでないぞ。（片手でおがむ）

小柄な男　ああ、背中がむずがゆい――。（二人、たち去ろうとする）

そのとき闇の中で銀杏の根元の黒い影が身動きして、突然、異様な弦の

音。驚いて二人がふり返ると、死んだはずの老女がふわふわと起きあがり、ふりしぼるような声で、

老女　うらまいでか――。

悲鳴をあげて樹の背後から逃げだす辻の女。男たち二人も腰を抜かして這いながら去る。月が雲間を抜けると、冷たい光がくっきりとあたりを照らしだす。奇怪な哄笑とともに、老女の死体を背後から抱えあげた異様な法師が木陰からあらわれ、錆びた声でうたいつつ、老女を高く捧げたまま舞う。平曲（へいきょく）に似ているが、詞章（ことば）はちがっている。

一期は夢ぞ　狂わんと
言えどせんなき幻の
人の命は石火（いしび）より

はやく消えゆく宿命(さだめ)なり
われが先かや　人や先
朝(あした)の紅顔たちまちに
無常の風の吹きくれば
ふたつの眼(まなこ)　とく閉じて
ただ白骨(はくこつ)ぞ　残りけむ
　　ただ白骨ぞ　残りけむ

いつのまにか窓の明かりは消え、朗読の声がとだえている。雲間からさす月光の庭先に、一冊の本を持ち、背中に赤子をおぶった蓮如の姿が浮かびあがる。ねずみ色の粗末な衣で、袖も丈も短くつめたものを着ている。うたい踊る死者と法師をみつめながら、じっと耳を傾けている蓮如。琵琶法師、うたい終ると老女を地面によこたえ、坐って蓮如に一礼する。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com